

「ゆづも」と「おもちゃ」と「創造力」(2)

〈お茶の水女子大学附属いずみナーサリー講演会より〉

和久洋三

多様と統一

ここで積み木遊びを通して、人間の思考について考えてみたいと思います。不思議なことに積み木遊びは思考の経路に見事に一致しているのです。

では思考経路とはどうなっているか。実は二つのことしかやっていません。「多様な情報を統一する」「統一された情報を多様化する」この二つです。これを往復しているのです。

見立て遊びで説明します。積み木を持って、

「ブーブーブー、バスだよ」と動かす。これが「一つのもの（統一された情報）を多様化する」世界であり、応用力につながっていくものです。それを一歳半の子が、誰に教わるわけでもないのに始めるのです。人間というのは本能的に自分を育てようという欲求をもっていて、それに向かって活動していきます。

それと同時に、いろいろなものがあると、寄せ集めて遊び始めます。これは「多様な情報を統一する」活動です。これらの活動が活発になることは、

思考が育っているということです。その時期が一歳半ごろです。

また、一つの直方体（の積み木）をバスに見立てられるというのは、抽象能力が育ってきているということでもあります。バスにはいろいろな形があるけれども、せんじ詰めれば「六面体で動くもの」ということを直感していない限り、これをバスに見立てることはできません。相当高度な能力です。それを一歳半の子が身につけているのです。

なぜ一歳半の子がその能力を身につけるのでしょうか。

二歳になると言語活動が始まります。言語というのは、抽象能力が育っていないと獲得できないからではないでしょうか。二歳になってしゃべり始める前に、子どもは見立て遊びの中で、その抽象能力を形を通して自己開発しているのです。

ところがほとんどの親は、子どもが「ブーブー、ママ、バスだよ」と言うと、「バスって言ったよ、パパ、あした、バス買ってきて」と、（おもちゃの）バスを与えてしまう。子どもは創造的な能力を自己開発することを楽しんでいるのに。バスはバスにしかならない。大人が子どもの自己開発を押しとどめてしまっているのです。

さて、では、この活動が充分に行われるためにはどんな形を与えたらいいのでしょうか。形というの



は、子どもがものを認識したり、表現したりするのに一番理解しやすい対象物です。認識手段には、音とか、においととか、色とか、いろいろなものがありますが、子どもは形に一番関心をもちます。なぜなら、五感を全部使って関係がもてるからです。形あるものは、手に持てばにおいがしますし、なめたら味わえます。何かにぶつければ音が出て、触ることができ、見ることができます。

この形あるものを通して、実は美とか、愛とか、真理とか、形のない世界を見つけていくのが人間です。あるいは逆に、彫刻家、画家、小説家は、形のない美や愛を色や形や文字など目に見えるものにして表現していきます。その行ったり来たりをするわけですが、まずは形を通して認識していく、五感を使って吸収していくことから始まります。

次に、「積み木を」こっぴやくて立てた。立てたも

のに触れると倒れた」ということがあると、もう一度倒してみるということをやりだします。これを繰り返して、「立っているものは、力を入れれば倒れる」ということを知っていきます。ボールであれば、「ボールは転がるものだ」ということを読み取り、それなら、もう一回転がしてみようとなります。その時に、強く転がしたらどうなるか、軽く転がしたらどうなるかなど試します。そこでだんだんいろいろな活動が始まってきて、より認識を深めていきます。つまり、形は、受け身ではなくて、積極的に働きかけていける対象でもあるのです。

だから子どもはおもちゃで遊ぶのです。実はおもちゃだけでなく、形あるものだったら何でも遊べます。その中でよく遊ぶもの、遊びそうなものをおもちゃとしていられるわけです。

多様と統一に話を戻します。一つのを最も多

様化する形は何でしょう。要するに人間が一番よく遊ぶ形です。それは「球」ボールです。ボールはどこから見ても同じ、最も単純な形です。

単純であるというのは、単純な秩序をもっているということ。球体は、中心点から表面までの半径が一定であるという秩序をもっています。ぽんと投げて、「あそこで弾ませて彼女に渡そう」とか、「あのグロープに入るようにしましょう」とかできるのは、この秩序が内在しているからです。

単純な法則性のある秩序の形ほど、自由な創造活動が展開されます。秩序と自由。本来は秩序と自由というのは正反対の言葉です。秩序があるから自由が奪われる、いろいろな規則がつくから自由だと、若い時はみんな思います。しかし違うのです。秩序があるから自由になる。球体は秩序があるから遊べるのです。

関係性

「何で?」「どうして?」と四歳児が知ろうとします。これは、因果関係・秩序を知りたがっているということ。それがわかったほうが自由になるからです。お釈迦様が最後に悟ったのは、因果の法だそうですが、それを四歳児が直感していて、「何で?」「どうして?」と因果関係を見つけ出そうとするというのはすごいことです。

きっと、子どもの成長の中で自然の欲求として出てきた言葉や態度をくみ取ってやると、素直で、大らかで、ひねくれない子どもが育つはず。ところが、大人の価値観を押しつけることが先になり、子どもが、今、何を求めようとしているのか、何を願っているのかということをくみ取ろうとする気持ちがないので、子どもは自然に素直に育つこと

ができず、少しずつねじ曲げられてひねくれていくのではないかと思えます。素直な欲求を受け入れてもらえないからです。

人間が自由になるために探っているのは秩序を踏まえた関係性です。人間は関係性を見つけ出そう、つくり出そうとしている生命です。「多様な情報を統一する」「統一された情報を多様化する」ことも、関係性探しです。すべての意識は、全部関係性に向かつて働いているという感じがします。

どうして人間の意識が関係性に向かつていくのでしょうか。自然を見ると、植物・動物・土・水・空気があります。その中で人間が生かされています。関係性の中で生かされているということです。簡単に言うと、空気がなくなったら人間は死ぬわけです。水がなくなったら死ぬわけです。人間の命と自然とは、別物ではありません。一つの命です。全部

関係づけられた世界です。だから、その関係性が崩れてくると、水が汚れたり空気が汚れたりして、人間の命にかかわるようなことになっていきます。

創造活動も、結局、多様な情報を関係づけていく作業です。あるいは、一つの情報をいろいろなところに関係づけて生かしていく作業です。それが、創造活動でもあります。何を見ても、全部関係性に向かつているのは、厳粛な事実で、暗示的です。

今、親子の殺人の尊属殺人がとも増えています。これも、すべて関係性が希薄になっていることからきているように思えます。「メールを通して」「携帯電話を通して」と、全部ワンクッション、機械が間に入ってコミュニケーションがとられています。生の生命（ま）と生命がかかり合うということがすごく少なくなつて、関係性をつくり出す中で起きてくるストレスに耐えられなくなつてきています。そ

れが今の社会で一番大きなゆがみが生まれる原因ではないかと感じます。

本来、人間は関係性に対して、とても敏感につくられています。それなのに、その関係性を排除して生きていこうとして、結果として、こういう事態を生んでしまったのではないかと思います。人と深くかかわらないことは、ある意味で楽なのです。

しかし、そこで成立するコミュニケーションは、たかが知れていて、深まりもしないし、強まりもしません。何かの事態が起きると、そのストレスに耐えられなくなつて、殺したり、傷つけたりすることによつて解決するしか方法をもてなくなっている。こういう世界が今生まれてきているという感じがしてなりません。

僕は、おもちゃのことを、「童具」という言葉をつくつて表現しています。

おもちゃの世界だけ、玩具とか、遊具とか、教具とか、教育玩具とか、教育と遊びに分けられている言葉が幾つも使われています。これは、形あるものは認識しやすいため、学びの教材として使いやすいため、教具とか、教材として利用されてきたのだと思います。

けれども、遊びというのは自発的な活動です。自発的な活動の中でこそ子どもには豊かな学びがあるわけです。それを遊と学に分けることはできません。そのために「童具」という言葉をつくらざるを得なかったのです。童謡、童話、童具、それでよいと思います。その童具で遊ぶことは、すべて「関係性を見つけ出し、関係性をつくり出す」遊びを生み出すものです。

（童具館）

（講演 平成十八年十二月九日）